

日本東アジア実学研究会主催  
第十三回「実心実学読書会」

日時：8月27日（土）14：00～17：00（日本時間）

作品：**濱野靖一郎さん**『「天下の大勢」の政治思想史：頼山陽から丸山眞男への航跡』（筑摩書房、2022.6.17）

コメンテーター：**田中豊さん**（関西学院大学 法学研究科 大学院研究員）  
**邊英浩さん**（都留文科大学 比較文科学部 教授）

# プログラム

## 【第一部 90分】

- 14:00-14:10 濱野さん前著ご紹介、趣旨説明（片岡）  
14:10-14:30 田中さんコメント  
14:30-14:40 濱野さんリプライ  
14:40-15:00 邊さんコメント  
15:00-15:10 濱野さんリプライ  
15:10-15:40 参加者との対話①  
15:40-15:50 休憩

## 【第二部 80分】

- 15:40-16:40 参加者との対話②  
16:40-16:55 自由感想（初参加者、Under-35中心）  
16:55-17:00 閉会挨拶、今後の予定（片岡）

# 濱野さん前著ご紹介 (片岡書評 『沖繩タイムス』ほか)

『頼山陽の思想—日本における政治学の誕生』(東京大学出版会、2014)

近年、過去の日本の思想家の再脚光・読み直しが盛んである。たとえば3.11以後では、田中正造・二宮尊徳など。最たる試みは聖徳太子非実在論だろうか。本書も同様に、頼山陽に対する**従来の解釈**を180度転換する。

従来とは、たとえば次のごとき解釈。山陽の歴史観は、英雄主義と尊王主義で、この単純な歴史観は、複雑な政治的变化を説明するのに不適。しかし、**政治学的無能**は、同時に、人物を躍動させる詩才ともなる […] (加藤周一『日本文学史序説』)。

[...] 誤解は山陽思想の本領である『通義』等が読まれなかったため。[...] その内容は伶俐な政治力学の理論。すなわち、山陽は煽動家、革命論者ではない。むしろ**東アジア初の政治学者**だ。

政治の核心とは何か。いわく、**統治者の「判断」**。判断は、選択肢を比較考量し、当面する状況により良い決断を下すこと。アプリアリな真理に従うのではない。その意味で、**先天的「理」を前提とする儒学(朱子学)は政治とは言えない**。

(承前)

当面する状況を形成する変化の力動を「**勢**」と呼ぶ。「勢」を無視した革命は、国家の崩壊を招き、多くの人民を死に至らしめる。一方、「勢」に追随するだけでも、いつか破綻する。

「**勢**」を分析し、主体的に制御していくために、君主は「**権**」(決定権)を把持する。こうしたマキアヴェリ的「君主論」は、あくまで「民」の生活の利便・安寧を守る手段であり、また国家間政治の力学も考慮に入れるものでもあった。  
[…]

## 趣旨説明（「実心実学」読書会としての今回のめざし）

主体的・能動的に「勢」の変化を制御していこうとする頼山陽の思想が、幕末・明治・大正を経て、ついには三国同盟の「バスに乗り遅れるな」、終戦の詔勅の「世界ノ大勢亦我利ニアラス」（、そして現在の日本の行動原理にまで）へと変質する過程を描き出した今回のテキストから、**「実心実学」の主体（「君主」ではなく「民」）のあり方を共に考える。**

# 今後の予定

- ・ 次回は**11月**を予定

※9月、10月は、共同研究1\*、共同研究2\*\*発表会

\*「土着的近代と実学：ロシア思想を媒介として」(仮)

\*\*「変革思想とアジア実学：初期社会主義を出発点として」(仮)

- ・ 次回テキストをご推薦ください！（テーマ：**ジェンダーと実学**）

